

17日 木



1 「めぐりあい」(1968年・91分)

【出演】黒沢年男 ほか

上映時間 午後1時～午後2時31分



2 「八月の濡れた砂」(1971年・91分)

【出演】村野武範 ほか

上映時間 午後2時50分～午後4時21分

18日 金



1 「伊豆の踊子」(1974年・82分)

【出演】山口百恵 ほか

上映時間 午後1時～午後2時22分



2 「忍ぶ川」(1972年・120分)

【出演】加藤剛 ほか

上映時間 午後2時40分～午後4時40分

2022年11月17日(木)・18日(金)

▶午後1時開演(30分前開場)

定員 330人(予定) / 全席自由

チケット発売

▶2022年10月14日(金)から

30 サーティホール

〔大東市立文化ホール〕大ホール

大阪府大東市新町13-30(JR学研都市線「住道」駅下車南東へ約500m)  
※駐車スペースに限りがありますので、お車のご来場はなるべくご遠慮ください。

主催:大東市文化協会 / 国立映画アーカイブ

後援:大東市

特別協力:文化庁 / (一社)日本映画製作者連盟 /

全国興行生活衛生同業組合連合会 / (株)松竹

運営:サーティホール自主事業実行委員会

協力:大東市立総合文化センター(指定管理者(株)アステム)

入  
場  
料

1日券 500円、2日券 700円  
当日券 100円増(1日券のみ販売)  
1日2本立、入れ替えなし

■チケット販売・お問い合わせ

大東市文化協会 TEL 072-873-0810

総合文化センター TEL 072-873-0030

※未就学児の入場はご遠慮ください。

※新型コロナウイルス感染症予防にご協力をお願いします。

純情と獍猛さが入り混じった青春の一瞬を、気鋭の監督たちが鮮やかに捉えた青春映画、恋愛映画の秀作を紹介。



優秀映画鑑賞推進事業

日本の名作映画



国立映画アーカイブ  
National Film Archive of Japan





## 『めぐりあい』 [1968年 東宝]

<b>【スタッフ】</b>	<b>【出演者】</b>	
脚本 山田信夫	江藤努	黒沢年男
脚本・監督 恩地日出夫	今井典子	酒井和歌子
撮影 田島文雄	江藤順平	桑山正一
照明 森弘充	江藤きよ	菅井きん
録音 吉岡昇	江藤宏	黒沢博
音楽 武満徹	今井正治	有島一郎
〃 岡田和夫	今井雅枝	森光子
美術 本多好文	今井一郎	池田秀一
	白井	田村亮
	石井綾子	進千賀子
	前田	柴田昌宏
	井上	峰岸隆之介

(カラー/シネマスコープ/モノラル/91分)

日本の高度成長を舞台裏から支えてきた工業都市・川崎。この休みなく動く街のなかで、自動車工場の組立工として働く努とペアリング店に勤める典子。それぞれに複雑な家庭事情を抱え、貧しさにもがきながらも、健気に生きている。そんな二人がふと出会い、恋に落ち、別れのつらさを乗り越えて、互いの愛を確かめ合う。『あこがれ』(1966)のヒットにより、東宝青春映画の旗手として注目を浴びた恩地日出夫が、酒井和歌子を初めて主演に起用し、時代の波や家族の重圧にもまれながらも、ひたむきに生きてゆく若者像を鮮烈に描き出した。脚本家の山田信夫が当初、日活の蔵原惟繕監督のために準備した脚本を、東宝が引き取って映画化が実現。武満徹作曲の主題歌を荒木一郎が唄い、タイトルバックをイラストレーターの中田誠が演出している。その後、東宝では1970年代半ばまで、森谷司郎や出目昌伸らがコンスタントに青春映画の傑作を発表していく。



## 『八月の濡れた砂』 [1971年 日活]

<b>【スタッフ】</b>	<b>【出演者】</b>	
脚本 峰尾基三	野上健一郎	村野武範
〃 大和屋竺	西本清	広瀬昌助
脚本・監督 藤田敏八	川西修司	中沢治夫
撮影 萩原憲治	稲垣和子	隅田和世
照明 大西美津男	三原早苗	テレサ野田
録音 古山恒夫	真紀	藤田みどり
音楽 むつひろし	亀井	渡辺文雄
〃 ペペ	井手	地井武男
美術 千葉和彦	五郎	山谷初男
	神父	原田芳雄

(カラー/シネマスコープ/モノラル/91分)

揺れ動く若者の行動と心理を硬質なタッチで瑞々しく描いた青春映画の名作であり、藤田敏八監督の初期の代表作である。主人公たちの〈大人〉に対する不信と反抗の姿勢は、この種の映画に特有なものであると同時に、学生運動などで大きく揺れ動いた1960年代後半の時代の気分を色濃く宿したものとと言えるだろう。ただその描写が反抗礼讃、青春万歳の紋切り型ではなく、優しさと残酷さの入り混じった、青春という名の一季節を、静かに見つめている点にこの監督の特徴がある。1950年代の『太陽の季節』とはまた別の、湘南の眩しく気怠い夏がスクリーンに溢れている。製作会社の日活はこの年をもって一般劇映画の製作を中止し、ロマンポルノへと移行したが、本作は青春映画を看板としてきた同社の光芒を放つ一本として「キネマ旬報」ベストテン第10位に選ばれた。



## 『伊豆の踊子』 [1974年 東宝=ホリプロ]

<b>【スタッフ】</b>	<b>【出演者】</b>	
原作 川端康成	かおる	山口百恵
脚本 若杉光夫	川島	三浦友和
監督 西河克己	栄吉	中山仁
撮影 萩原憲治	千代子	佐藤友美
照明 高島正博	のぶ	一の宮あつ子
録音 木村暎二	百合子	四方正美
音楽 高田弘	おきみ	石川さゆり
美術 佐谷晃能	よし子	宗方奈美
ナレーター 宇野重吉	鳥屋	江戸家猫八
	福田屋の板前	鈴木ヒロミツ
	茶屋の老婆	浦辺粂子

(カラー/シネマスコープ/モノラル/82分)

青春小説の名作として知られる川端康成の同名作の映画化。田中絹代と大日方伝が主演した、五所平之助監督の松竹作品(1933)を第1回として、これまでに全部で6回映画化されている。踊り子を演じたのは、美空ひばり、鰐淵晴子、吉永小百合、内藤洋子らで、いずれもその時代の青春スターであった。本作の特徴は、五所作品と同じく、旅芸人たちの社会的な位置を明確にしている点にある。その視点はラストの印象的なストップモーションからも見てとることができるだろう。西河克己監督にとっては、1963年の吉永小百合主演作品に次いで2度目の映画化であった。山口百恵は1970年代のアイドル歌手で、絶大な人気を誇っていた。相手役となる一高生役は公募され、まだ無名だった三浦友和が抜擢された。この後二人は「百恵=友和」のゴールデンコンビとして12本の作品で共演し数々のヒット作を放ち、1970年代青春映画に大きな足跡を残すが、1980年に結婚。山口百恵は芸能界を引退した。



## 『忍ぶ川』 [1972年 俳優座映画放送]

<b>【スタッフ】</b>	<b>【出演者】</b>	
原作 三浦哲郎	哲郎	加藤剛
脚本 長谷部慶次	志乃	栗原小巻
脚本・監督 熊井啓	哲郎の父	永田靖
撮影 黒田清巳	志乃の父	信欽三
照明 岡本健一	香代	岩崎加根子
録音 太田六敏	哲郎の母	滝花久子
音楽 松村禎三	木村幸房	滝田裕介
美術 木村威夫	次兄	井川比佐志

(白黒/スタンダード/モノラル/120分)

三浦哲郎(1931-2010)の自伝的な同名小説(第44回[1960年下半年]芥川賞)を映画化したもので、『帝銀事件 死刑囚』(1964)や『日本列島』(1965)などの社会派映画の監督として名を馳せていた熊井啓監督が、長い準備期間を経て完成させた恋愛映画の秀作。兄の失踪や姉の自殺などを経験して暗鬱な家庭環境に育った東北出身の大学生・哲郎と、深川の洲崎パラダイスにある射的屋で育ち、今は料亭「忍ぶ川」の仲居として働く志乃の純愛物語で、二人が出会い、互いの心の闇を打ち明けて信頼し合い、そして幾多の障害を乗り越えて結婚にいたるまでの過程が、叙情的なモノクロームの映像で描かれる。主演の栗原小巻が、優しさと芯の強さをあわせ持つ女性を熱演して高く評価された。「キネマ旬報」ベストテン1位。